五嶺考

——南支那の交通路——

北山康夫

秦末の天下大亂に際して、嶺南の地に自立を計つた南海尉任囂は龍川令趙佗を呼んで、

番禺負山險阻南海。東西數千里。頗有中國人。相輔此亦一州之主也。（史記卷一百十三南越尉佗列傳第五十三）

と謀つてゐる如く、實に嶺南の地は北に南嶺山脈を負ひ、南海に面し、その地形恰もアルプスを負ふ北イタリヤの如く、その形勢最も完固であり、自ら一の地理區をなしてゐる。されば、唐の貞觀の初嶺南道が設けられてより、咸通二年にはこれが二分せられて嶺南東道・嶺南西道となり、宋の淳化四年再び合せられて廣南路となつたが、間もなく至道三年には廣南東路と廣南西路に分たれ、これが今日の廣東廣西兩省となるのであつて、古來南嶺を境として必ずこゝに一の行政區劃が成立し、又戰亂に際しては彼の任囂の如く、この地によつて一州の主とならんとするものが現れるのが常である。

さてこの嶺南地方の北の障壁をなすところの南嶺山脈中の交通路の狀態を考へて見るに、南嶺は古來又五嶺の名を以て稱せられ、この五嶺については唐の顏師古は之に註して、

服虔曰。山領而有五。因以爲名。交趾合浦界有此領。師古曰。服說非也。領者西自衡山之南。東窮于海。一山之限耳。而別標名則有五焉。裴氏廣州記云。①大庾・始安・臨賀・桂陽・揭陽是爲五領。鄧德明南康記曰。②大庾嶺一也。桂陽騎田嶺二也。九眞都龐嶺三也。臨賀萌渚嶺四也。始安越城嶺五也。師古曰。裴說是也。（漢書卷三十二張耳陳餘傳）

といひ、服虔が五嶺を以て交趾合浦の附近の山の名と

したのを非として、西の方湖南省の衡山の南に起つて東の方海に到る山脈の名なりとし、その中に大庾・始安・臨賀・桂陽・揭陽の五山があるとしてゐる。然しながら、五嶺の名は漢書卷三十二張耳陳餘列傳に、

秦爲亂政虐刑殘滅天下。北爲長城之役。南有五領之戍。云云

とあるのが初見であつて、これによれば始皇帝の南越征服の後、南嶺地方の蠻人に備ふるために五嶺の地に兵を駐屯せしめたのであるから、その位置は必ず南北の交通路を扼する地點であらねばならぬ。③かく考ふるときは晉書地理志卷十五に、五嶺について、

秦始皇既略定楊越。以謫戍卒五十萬人守五嶺。自北徂南入越之道。必由嶺嶠。時有五處。故曰五嶺。

といひ、五嶺を以て嶺嶠なりとしたのを以て一層妥當としなければならぬ。

事實南嶺を越えて廣東に到る通路は、始皇帝の南越征伐以來大いに利用されるやうになつたらしく、史記卷一百十三南越趙佗列傳に、南海尉任囂が嶺南の地に獨立を企て、龍川令趙佗に語つた言葉の中に、

吾恐盜兵侵地至此。吾欲興兵絕新道。

といふ語があり、新道とは索隱にもいふ如く明らかに秦が南越に通ずるため新しく開いた通路であり、任囂の死後その旨を奉じて自立した趙佗は、任囂の言に從つて橫浦・陽山・湟溪の諸關を閉ぢたといはれて居り、之等の諸關は今日その位置を明らかにする事ができないが、兎に角南嶺山脈中の交通路を扼する地點にあつたに違ひない。かくて始皇帝の南越征服の後、中央の威令が嶺南の地に及ぶと共に、こゝに南嶺山脈中の交通路も初めて重要性を帶びるやうになつたのである。

その後趙佗の子孫は長く嶺南の地に獨立を保つてゐたが、漢に武帝といふ外征好きな天子が出ると、その獨立は最早や許されなくなつた。卽ち武帝は元鼎五年大規模なる南越征伐を敢行したのであつて、その進軍の狀況は漢書卷六に稍〻詳細に之を傳へ、

遣伏波將軍路博德出桂陽下湟水。樓船將軍楊僕出豫章下瀕水。歸義越侯嚴爲戈船將軍出零陵下離水。甲爲下瀨將軍下蒼梧。皆將罪人江淮以南樓船十萬人。越馳義侯遣別將巴蜀罪人。發夜郎兵下牂柯江。咸會番禺。

といつてゐる。卽ち漢の軍隊は廣東に向つて五方より

進撃した。その中伏波將軍が桂陽(湖南・郴州)より湟水に下つたといふのは、湖南の湘水を溯つて郴州に至り、そこから陸路南嶺を越えて北江の一支流、今日も湟水と呼ばれる川に出たのであり、樓船將軍が豫章に出でゝ湞水を下つたといふのは、江西の贛水を溯つて同じく北江の一支流、今日も湞水の名を以て呼ばれる川に出たのであり、又戈船將軍が零陵に出でゝ離水を下つたといふのは、卽ち湘江を溯つて零陵(湖南・永州)に到り、そこより桂水の上流、今日も尙ほ灕水を以て稱せらるゝ川に出でたのである。戰爭に際して大部隊の通過するところは亦多くの場合、當時の交通幹線である。伏波將軍・樓船將軍・戈船將軍の進んだ道も亦當時の南支那の重要なる交通路であつたであらう。

事實後漢書(卷六十三)鄭弘傳には、

建初八年代鄭衆爲大司農。舊交趾七郡貢獻轉運皆東治汎海至。風波艱阻沉溺相係。弘奏開零陵桂陽嶠道。於是夷通。遂爲常路。在職二年所省息以億萬計。

と見え、これは通鑑(卷四十六)の胡三省の註④にもいふ如く、此の時初めて此の通路が開かれたものではないが、とにかく後漢の時代にあつても、湘江を溯つて零陵に至り、そこより陸路桂林に至るものと、同じく湘江を溯つて桂陽(湖南・郴州)に至り、そこから北江の支流の湟水又はその上流の韶州(廣東省曲江縣)に出づるものが、重要な通路であつたことを物語つてゐる。

さて通典の著者杜佑も亦五嶺について說を立て、

自北徂南入越之道。必由嶺嶠。時五處。塞上嶺一也。今南康郡(江西・贛州)大庾嶺是。騎田嶺二也。今桂陽郡(湖南・郴州)臘嶺是。都龐嶺三也。今江華郡(湖南・道州)永明嶺是。毗渚嶺四也。亦江華界白芒嶺是。越城嶺五也。今始安郡(廣西・桂林)北零陵(湖南・永州)南臨源嶺是。(通典卷一百八十四)

といつてゐる。この杜佑の說によれば、先に顏師古が引用した南康記に見ゆる大庾嶺・騎田嶺・都龐嶺・萌渚嶺(毗渚嶺)越城嶺は、實は師古が考へた如く、南嶺山脈中の山嶺ではなく、南嶺山脈中の峠であり、嶠道に他ならないといふのであるが、實際これらの中、大庾嶺・越城嶺の如きは、明らかに南嶺山脈中の通路であつて、その他の諸嶺も亦杜佑の考へた如く嶺嶠であつたであらう。かゝる說を一層鮮明に主張したのは宋の周去非であつて、彼は、

自秦世有五嶺之說。皆指山名之。考之入嶺之途五耳。非必山也。自福建之汀。入廣東之循梅。一也。自江西之南安。踰大庾入南雄。二也。自湖南之郴入連。三也。自道入廣西之賀。四也。自全入靜江。五也。（嶺外代答卷七。）

といひ、五嶺とは南嶺中の五つの通路であつて、福建の汀州より廣東の循（惠州）梅（梅縣）に出づるのがその一であり、江西の贛江を溯つて南安（江西省南安縣）に到り、南安より大庾嶺を越えて北江の上流南雄（廣東省南雄縣）に到るのがその二であり、湘江を溯つて郴州に到り、郴州より陸路騎田嶺を越えて北江の支流湟水の上流にある連州（廣東省連縣）に出づるのがその三であり、同じく湘江を溯つて道州（廣東省道縣）に到り、そこより陸路甿渚嶺を越えて賀江の上流賀州（廣西省賀縣）に到るのがその四であり、同じく湘江を溯つて全州（廣西省全縣）に到り、そこより越城嶺を越えて桂江の上流灕水によつて靜江（廣西省桂林府）に到るものがその五であると考へたのである。

さて秦の五嶺はともかく杜佑及び周去非の說は、唐宋時代の實際の交通狀況よりこの說を立てたものであるから、これによつて唐宋時代或はそれより溯つた時代の交通の狀態を知ることができる。特に周去非は桂林に官吏たりし人であるから、宋代南支那の交通には通曉してゐたと考へられ、殊にその交通路は、それが何れも贛江及び湘江上流の舟運の終點と、北江・賀江・桂江の舟運の起點とを結ぶものであつて、極度に水運を利用して居り、彼の武帝の南越征伐が水軍を主とするものであつたことゝ關聯し、南船北馬の實狀を雄辯に物語るものといはなければならぬ。

さて唐代南支那の交通路は、元和郡縣志によつてこれを知ることができるが⑤、それによると湘水を溯つて潭州（湖南省長沙縣）衡州・永州を經て廣西に入り、靈渠によつて灕水に出で、以て桂林に到るものと、衡州よりこれと別れて郴州に到り、郴州より騚嶺を越えて北江の上流韶州に出で、韶州より廣東に到るものと、（今日の粵漢線と略ゝ同じ）。江西の贛江を溯つて洪州（江西省南昌縣）虔州（江西省贛縣）を經て江西省を縱斷し、大庾嶺を越えて韶州に出で以て廣東に到るものとが三大交通幹線であつた。宋代に於ても略ゝ之と同じであり⑥、その後清朝時代にあつても、大庾嶺を越えて

廣東に到るものと、湘江を溯つて灕水に出で、以て桂林に到るものとは、廣東官路・廣西官路と並び稱せられ、南支那の二大官馬大路として重要視せられた。以下これら二つの通路について說明することゝしよう。

（一）大庾嶺

大庾嶺は又梅關・紅梅關・橫浦關の名を以て稱せられ、所謂五嶺の東第一にあり、南嶺も亦一名大庾嶺山脈の名を以て稱せられる程著名なものであり、江西省南安府の西南二十五支里、廣東省南雄縣の北六十支里のところにある。實に南嶺を越ゆる交通路の最も重要なるものであり、この大庾嶺を越ゆると共に嶺南となり、その風土・氣候・人情風俗等大いにその趣を異にするといはれてゐる。この地を經て嶺南に到るには、普通鄱陽湖に注ぐところの贛江の水運を利用して民船によつて江西省の南安まで溯り、南安からは陸路百二十支里、大庾嶺を越えて廣東省南雄に到り、こゝから又湞水の水運を利用して韶州に出で、韶州から又北江によつて廣東に到るのであるが、その間多くは贛江・北江の水運を利用することができるので、嶺南に到る第一の交通路となり、清朝時代には廣東官路として最も重要なる幹線となつてゐた。

さて大庾嶺は古く秦の始皇帝が南越征伐を行つて、五十萬の大軍を配して五嶺を守らしめたとき、大庾嶺もその一であつたとされ、又秦末の動亂に際して嶺南の地で自立を計つた趙佗は「盜兵到らば急に門を閉ぢて道を絕て」と命じた橫浦關は、大庾嶺にあつたといはれ、⑦又武帝の南越征伐に當つて、樓船將軍となつた楊僕は豫章より湞水に出でたといふのは、實にこの大庾嶺を越えたことに他ならない。⑧かくの如く北より南嶺南を襲はんとするものは、必ずこの地を經過するを常とし、宋の南漢討伐、蒙古軍の南宋征服、明の嶺南平定等枚擧に遑がない程である。

さてかく戰時にあつて重要なる軍隊の通路となつた大庾嶺は、又平時にあつても江西と廣東とを結ぶ交通幹線であつた。新唐書地理志（卷四十三上）の嶺南道韶州始興の條には、

有大庾嶺。開元十六年。詔張九齡開。

と簡單に記されてゐるが、全唐文（卷二九）所收、張九齡の開大庾嶺路の一文には、

以載則會不容軌。以運則負之以背。而海外諸國日以

通商。齒革羽毛之。殷魚鹽蜃蛤之利。上足以備府庫之用。下足以贍江淮之求。而越人綿力薄材。夫負妻戴。勞亦久矣。不虞一朝而見恤者也。不有聖政。其何以臻茲乎。開元四載冬十有一月。俾使臣左右遺內供奉張九齡。飲冰矢懷執藝。是度緣磴道。披灌叢。相其山谷之宜。革其坂險之故。歲已農隙。人斯子來役。匪逾時成者。不日則已坦坦而方。五軌闊闊而走。四通轉輸。云云

と記され、張九齡の改修によつてその道路は坦々たる大道となり、當時アラビヤ人によつて將來せられた珍貨や南海の特產物が陸續として、大庾嶺を越えて北方に運搬された狀況が想像に難くない。更に宋代に及んでは、蔡挺・蔡抗の兄弟がこの道路を改修した。宋史（卷三百二十八）蔡挺傳に、

越數歲稍起。知南安軍提點江西刑獄提舉虔州監。自大庾嶺下南至廣。驛路荒遠。室廬稀疎。往來無所芘。挺兄抗時爲廣東轉運使。迺相與謀。課民植松夾道。以休行者。

と記されてゐるが、知南安軍たりし蔡挺は、時に廣東轉運使たりし兄抗と相談して、道路の兩側に松並木を植ゑて、旅行者休息の便を計つたのである。

かくの如く大庾嶺を越ゆる廣東官路は、戰時平時共に嶺南に到る重要なる幹線道路であり、從つて大庾嶺の北の南安府・贛州とその南の南雄・韶州は何れも民⑨船の起點又は終點として、或は交通路を扼するところの戰略地點として、平時にあつては民船輻輳して商業殷賑を極め、戰時にあつては攻略の第一目標となり、重要視せられたのであつた。

（二）越城嶺

越城嶺は廣西省興安縣の北三支里のところにあり、湖南より廣西に到る交通路の要衝に當り、この地に於て南嶺を越ゆる交通路は、清朝時代廣西官路として、東の方廣東官路と共に二大官馬大路として、重要視せられてゐた。

秦の始皇帝の南越を伐つや、五嶺の地に五十萬の大軍を派遣して、之を守らしめたが、今桂林の北八十支里のところには秦城の遺跡⑩があつて、始皇帝の駐屯兵のあつたところといはれ、又漢の武帝の南越征伐に際しても、戈船將軍となつた歸義越侯嚴は、零陵（湖南永州）より離水を下つたといはれてゐるが、離水は實

に桂水の上流であつて、この地を通過したのであり、[11]降つて宋が南漢を伐つたときにも、その一軍は桂林を襲つてゐる。

而して反對に嶺南の地より北に向つて行動を起す場合にも亦、この交通路は屢〻用ひられ、その最も顯著なものは唐の黃巢と清の長髮賊である。唐の僖宗乾符六年浙江・福建より廣東に侵入した黃巢は、嶺南節度使の職を要求したが、唐朝は廣東には市舶司があつてその利益莫大なものがあつたため之を惜んで與へなかつたので、意を決した黃巢は、桂林に於て大桟十を組み、暴水に乘じて一擧にして湘江を下り、永州・衡州等要衝の地を次ぎ〳〵に陷落して揚子江に出で、更に北上して東都洛陽を陷れ、進んで都長安に迫つたので僖宗も西の方成都へ蒙塵しなければならなかつた。降つて清朝の道光末年廣西省金田村に亂を起した洪秀全が、先づ廣西要衝の地桂林を襲ひ、黃巢と同じく湘江を下つて揚子江に出で、南京に據つて天下の大亂となり、清朝をして崩壞の危機に瀕せしめたことはよく知られてゐるところである。

かくの如く、北方より嶺南を襲はんとするもの、反對に南方より揚子江に出でんとするもの、何れもみなこの通路を以て必須の要路とするのは、一にはこゝより廣西に出づれば西江の水運を利用して直ちに廣東を衝くことを得、又反對に北に出づれば直ちに湖廣低地に出で、揚子江を下つて武漢三鎭・南京を衝くことができるからであるが、一には又このところに於て南嶺を越ゆることが、最も容易であるからである。卽ち、桂水と湘水とを結ぶところの靈渠といふ運河があるからである。

この靈渠については、新唐書地理志四十三卷桂州の條に、理定。中。本興安。武德四年置宣風縣。貞觀十二年省入焉。至德二載更名。西十里有靈渠。引離水。故秦史祿所鑿。後廢。寶曆初觀察使李渤立斗門十八。以通漕。俄又廢。咸通九年刺史魚孟威以石鏟隄亘四十里。植大木爲斗門至十八重。乃通巨舟。

といふ記載があつて、運河の起原を秦代とし、[12]唐代屢〻改修されたことを述べてゐるが、宋史河渠志卷九十七にも亦靈渠の一條があつて、宋代改修の狀況を知ることができる。然し乍ら、この運河の構造については、宋代桂林に官吏たりし周去非の著す嶺外代答卷一に最も詳

細に之を傳へてゐる。卽ち、

深不數尺。廣可二丈。足泛千斛之舟。渠內置斗門三十有六。每舟入一斗門。則復閘之。俟水積而舟以漸進。故能循崖而上。建瓴(カメフクツガヘシテ)而下。以通南北之舟楫。嘗觀祿(監祿)之遺跡。竊嘆始皇之猜忍。其餘威能罔水行舟。萬世之下乃賴之。豈唯始皇。祿亦人傑矣。因名曰靈渠。

と述べてあり、之によれば舟が一水門を入るとその水門を閉ぢ、水渠に水の蓄るをまつて次の水渠に入る仕組になつて居り、丁度今日のパナマ運河に見るが如くであり、之によつて千斛の舟も通過できたといふから、その南北交通に資するところも亦大であつたらう。秦の南越征伐に當つて、此の水路を利用して食糧を送つたといはれるのも成程と思はれる。

かくてこの交通路を扼するところの桂林は始皇帝の頃より今日に至るまで、廣西の政治軍事の中心であり、形勢之險。襟喉之會。水草之美。風氣之佳。眞宿兵之地。據此要北臨南方。水已出渠。自是可以方舟而下。陸苟出關。(嚴關)自是可以成列而馳。進有建瓴之利勢。退有重險之可蟄。宜百粵之君。委命下吏也

といはるゝのも亦宜なりといはなければならぬ。[13]

結語

以上私は秦の五嶺を手がゝりとして、南支那と中支那との交通路について究明するところがあつたが、その結果、この南嶺を越ゆるところの交通路は、何れも河川の舟運と河谷に沿ふ道路を極度に利用したものであり、從つてそれは甚しく自然の制約を受けつゝ、最も便利なコースをとつてゐることゝ、又そのため、秦漢時代以後略ゝ同じ道程をとつてゐて餘り變化してゐないことが明らかにされた。平均一千米の高度をもつ南嶺も、これに源を發する河川を利用することによつて、廣西官路の如く殆んど舟運のみによつても越ゆることができる。今更ら南方支那の水運の便に惠まれてゐることを痛感すると共に、又南支那と中支那との交通が想像以上に容易であり頻繁であつたことに驚くのである。

註

① 裴氏廣州記とは卽ち、裴淵の廣州記であつて、今日は佚

して傳らないが、左傳正義をはじめとして、水經注・齊民要術・太平御覽等に引用されてゐる書である。（王庸著中國地理學史。一五六頁）

② 鄧德明の南康記も亦傳はらないが、水經注や太平寰宇記にも引用されてゐる書である。（王庸著中國地理學史 一五九頁）

尙南康記に擧ぐる五嶺の名は顧野王の輿地志（史記卷六正義所引）や通典・水經注もこれに從つてゐる。顧祖禹の讀史方輿紀要は、顏師古と同じく五嶺を以て南嶺山脈中の五山なりと解釋してゐるが、その位置について、大庾嶺は江西省南安府の西南二十五支里、廣東省南雄縣の北六十支里のところに、騎田嶺は湖南省郴州の南三十六支里のところに、都龐嶺は湖南省永明縣の北五十支里のところに、萌渚嶺（屹渚嶺）は湖南省江華縣の西一支里のところに、越城嶺は廣西省興安縣の北三支里のところにあるとしてゐる。

③ 淮南子 卷十八 人間訓に、

又利越之犀角象齒・翡翠・珠璣。及使尉屠雎。發卒五十萬爲五軍。一軍塞鄣城之嶺。一軍守九疑之塞。一軍處番禺之都。一軍守南野之界。一軍結餘干之水。三年不解甲弛弩。使監祿以轉餉。又以卒鑿渠而通糧道。以與越人。云云。

と言つてゐるのは、略々當時の實情を傳へたものといふべく、鄣城は彧陵（湖南省常德）の西南に、九疑は零陵（湖南省永州）附近に、南野及び餘干は大庾嶺附近にあつたものと考へられ、何れも南北交通路を扼するところであつた。

④ 資治通鑑 卷四十六、の胡三省の注に、

余據武帝遣路博德伐南越。出桂陽下湟水。則舊有是路。弘特開之。使夷通。

とある。

⑤ 參照

白壽彝著中國交通史（一一二頁—一一七頁）

世界歷史大系東洋中世史第二篇（唐の交通と隋の大運河）

⑥ 世界歷史大系東洋中世史第三篇（宋の交通）

⑦ 讀史方輿紀要 卷八十三

⑧ 資治通鑑 卷二十、胡三省が湞水に注して、

應劭曰。湞水出南海龍川西入秦水。水經湞水逕桂陽郡之湞陽縣南而右注溱水。

とあり、溱水は卽ち今日の北江であるから、湞水は卽ち廣東省南雄縣・始興縣の附近を流れて北江に注ぐところの今日も尙ほ湞水の名を以て稱せらるゝ河に他ならず、從つて樓船將軍楊樸は大庾嶺を越えたものと斷じてよからう。

⑨ 讀史方輿紀要には、南安府については、

府南扼交廣。西距湖湘。據江西之上游。拊嶺南之項背。（中略）今郡城南去庾嶺不及一舍。爲南北要衝。行旅往來。必取途於此。蓋猶秦漢故道矣。

と述べ、贛州については、

江西之有九江。險在門戶間者也。此夫人而知之也。江

西之有贛州也。險在堂奥也。此夫人而知之也。棄門戸而不守者敗。爭門戸之間而不知堂奥吾後者敗。棄堂奥而不事者敗。云云

といつて、九江を以て江西の門戸とし、贛州を以て江西の堂奥としてをり、南雄府については、

府當庾嶺要口。爲南北噤喉。（中略）南漢置雄州。爲北面重鎭。

といひ、韶州については、

府脣齒江湘。咽喉交廣。據五嶺之口。當百粤之衝。且地大物繁。江山秀麗。誠嶺南之雄郡也。

といつてゐる。

⑩ 水經注 卷三十八 湘水の條には、

越城嶠水。南出越城之嶠。嶠卽五嶺之西嶺也。秦置五嶺之戍。是其一焉。

とあり、又嶺外代答 卷十 に、

湘水之南。黸渠之口。大融江・小融江之間。有遺堞存焉。名曰秦城。實始皇發謫戍五嶺之地。

と述べてゐる。

⑪ 水經注 卷三十八 瀝水の條に、

漢書所謂出零陵。下瀝水者也。

といつて居り、漢書所謂とは歸義越侯嚴のことを指してゐるのである。

⑫ 淮南子（註③參照）によると運河を開鑿したのは、監祿なりとしてゐる。

⑬ その他この廣西官路要衝の地は、全州・永州・衡州であつて、全州については、

州北連永邵南蔽桂林。舟車絡繹。號爲孔道。從來有事粤西者必爭全州。蓋界壤相錯門戸所寄也。

といはれ、永州又粤西（廣西）の門戸とされ、衡州については、

府襟帶荊湖。控引交廣。衡山蟠其後。瀟湘遶其前。湖右奥區也。且自嶺北取道湖南者。必以衡州爲衝要。由宜春（江西・袁州）而取道粤西。衡州又其要脊也。南服有事。綢繆可不蚤歟。

といつてゐる。